

死相の女

野村胡堂

—

「親分、お早う」

ガラツ八の八五郎は、顎あごをしゃくつてニヤリとしました。

「何がお早うだい、先刻上野の午刻このつが鳴ったぜ。冗談じゃない」

銭形の平次は相変らず、狭い庭に降りて、貧弱な植木の世話に没頭ぼつとうしておりました。

「親分の前だが、今日は嬉しくてたまらねえことがあるんだ」

「それで朝寝をしたというのかい、呆あきれた野郎だ。昨夜ゆうべどこかで化ぼかされて来やがったろう」

「へッ、そんな氣障きざなんじゃありませんよ、憚はばかりながら太閤様たいこうさまと同じ人相なんだ、金が溜たまって運が開けて、縁談は望み放題と来やがる」

八五郎は拳固げんこで鼻を撫であげます。

「大きく出やがったな、八」

「ね、親分、八卦けや人相見なんて、本当に当るんでしょうか」

「そりや当るとも、八五郎が太閤様に似ているなんざ、凡人の知恵で言い当てられることじゃねえ」

「——ですかね」

「縁談が望み放題、なんと来た日にゃ、たまらないね、八」

「なアに、それ程でもねえ」

八五郎はまだ顎を撫でて居ります。

「誰がいったいそんな罪なことを言ったんだ」

「両国の玄々齋げんげんさいですよ」

「何だ、あの山師野郎か」

両国の広小路に、葭簾よしずか何か張って、弟子の一人も使っている

人相見、その頃、江戸中の評判男で、一部からは予言者ほど尊敬そんけい

され、一部からは大山師のように言われていた玄々齋でした。

「山師でも何でも、当りやいいでしょう、親分」

「そうとも、てめえ手前の顔が太閤様そっくりなんてえのは気に入つたよ。太閤様がお猿そっくりの顔をしていたって話は知ってるだろ
うな」

平次は縁側に腰をおろして煙草にしました。

「猿？」

「猿公だよ、えてこうハツハツ、飛んだ洒落しゃれつ気のある人相見じゃないか」

「畜生ツ、どうするか見やがれ」

ガラツ八は大きく舌鼓したづつみを打ちました。

「怒るなよ、そんな事で腹を立てると、笑い者にされるよ」

「でも、太閤様の口はおまけにしても、金が溜たまって、運が開けて、嫁よめは望み放題はいいでしょう。玄々齋の八卦けや人相は、怖いほど当るって評判じゃありませんか」

「本当にそんなに当るのかい」

平次は少し酔っぱい顔をしました。

「近頃大変な評判じゃありませんか。運勢、縁談、失せ物なんか、よく当るそうですよ」

「縁談望み放題なんか、当ってもらいたいね、八」

「それほどでもないが——」

「いい加減にしろ、馬鹿馬鹿しい」

二人の話には埒らちもありません。初夏の陽は縁側から落ちて、何処なえやからともなく苗屋の呼び声が聞えます。

「玄々斎といえは、あんなに玄々斎へ夢中になつていた鳴子屋なるこやの女主人のお釜が死んだそうですね」

「あんな達者な婆さんがね」

「死んで見たら、あんなに骨を折つて溜めた金を、皆んな娑婆しゃばへ遺のこして来た事に気が付いたってね」

と八五郎。

「そこへ行くとこちとらは死んだとき未練みれんがなくていい」

「その代り、生きている時は張合がない」

平次と八五郎の話はいつでもこういった調子です。花が散ってからはすっかり御用も暇ひまで、無駄を言い言い、植木の世話でもするより外に所在もない二人だったのです。

「そう言えば、先刻さっき鳴子屋の下男さつきの七平に、親分の家の前で二度逢いましたよ」

八五郎は妙なことを言い出しました。

「変だね、お釜婆かまさんが死んだのは何時いつだえ？」

「昨日の朝、死んでいるのを見付けたそうで」

「そいつは何かいわ曰くわがありそうだ、気の毒だが、八」

「へエ——」

「ちよいと路地の外を見て来てくれ。七平がまだその辺にウロウロしているなら、いやおう嫌応言わせずにつれて来るんだ」

「へエ——」

獲物の匂いを嗅いだ獵犬のように、八五郎は外へ飛出しました。こうして瓢箪ひょうたんから駒が出るほどの大きな騒ぎになったのです。

二

「此方へ来るがいい、何を遠慮するんだ」

八五郎は鳴子屋なるこやの下男七平を引立てるように路地に入って来

ました。

「親分さん、勘弁して下さい。悪気でウロウロしていたわけじゃございません」

ともすれば逃腰になる七平は、江戸に住み付いた遠国者らしい、五十前後の線の太い親爺でした。

「八、そんな手荒なことをしちやならねえ。爺さん、お前何か、この私に用事があるんだらう」

「へエ——」

言い当てられた様子で、七平はへタへたと上りかまち框に腰をおろしました。

「言つて見るがいい、悪いようにはしないから」

「どうも腑ふに落ちねえことがございますよ、親分さん」

七平はようやく重い口を切りました。

「何だい、その腑ふに落ちないというのは？」

「――」

七平は考え深そうに口を緘つぐみました。言つていいのか悪いのか、まだ迷つている様子です。

「路地の外でお百度を踏んだつて、御利益りやくのあるわけはねえ。その腑ふに落ちないというのを、打ちぶまけて見るがいい、十手や捕縄とらなわを忘れて、この平次が相談相手になつてやろうじゃないか」

片膝を立てた平次、七平の頑固がんこな様子をほぐすように、こう言うのです。

「有難うございます。親分さん、実は——」

「？」

「主人あるじの死しによろが、唯事ただごとじゃないような気がしてなりません」

「それはどう言うわけだい」

「あの騒さわぎのあつた昨日きのうの朝、私が起出して見ると、お勝手の戸が開いておりました」

「それっ切りか」

「そんな事は滅多に無いことでございます。戸締りは主人が御自

分で見廻りますから——」

「それから」

「主人が亡なくなつたと聞いて、私も一と目お別れをするつもりで奥へ参りますと、番頭さんに途中で止められてしまいました」

「？」

「二十年も奉公した私に、主人の死顔を見せられない筈はございません。あんまり変だから、そつと隙見をすると——」

七平はゴクリと固唾かたずを呑みます。

「なにか変わったことがあつたのか」

「若旦那の金三郎さんと、番頭の用助ようすけさんと、主人の甥おいの久太郎

さんが、何かヒソヒソ相談をしておりましたが、——チラと見た主人の死顔が、どうも容易よういじゃないように思います。それに、小耳はさに挟はさんだ言葉の中に、紐ひもの跡あとが頸筋くびすじに残のこって居るといふようなこともありました」

「フム」

「若もしあれが変死へんじだったら、死んだ主人がお気の毒でございませぬ。御存ごぞんじの通り、評判へいばんの悪い主人でございませぬが、二十年奉公ほうこうした私は、黙もくってあのまま葬ほうむられるのを見てはおられませぬ」

下男七平げなんしちへいの話はなかなか含蓄がんちくがありそうです。

「お葬ほうむいは？」

「今日の未刻やつということになって居りますが」

「医者には診みせなかつたんだね」

「へエ——、医者が入ったことのない家でございます」

七平は淋しく笑いました。爪に火を灯ともすような、江戸一番の吝しわん坊なるこやの鳴子屋は、いかにもそれ位のことがありそうです。死骸は寺で引受けさえすれば、そのまま葬ほうむられた時代は、これでも通らないことはなかつたのでした。

「八、いま何刻だろう？」

「午刻半このつはんでしょうね」

八五郎は天文を按あんずる恰好で答えます。

「大急ぎで中橋の鳴子屋へ行つてくれ。気の毒だが検屍けんしが済まないうちは、葬いを出さしちやならねえ」

「心得た」

八五郎のガラツ八は、弾はずみ切つて飛んで行きました。その後姿を見送つて、

「鳴子屋の家のことを、一と通り聞かしてくれ」

平次は七平に訊ねます。

「主人のお釜さんは四十三で、旦那が五年前に亡くなりましたが、お店を切り廻して、身上しんしょうは太るばかりでございました。支配人の用助さんは私より三つ年下の五十四で、養子の金三郎さんは二十

五、ゆくゆくは主人の姪めいのお紋さんと嫁合めあわせることになって居りますが――」

「外には」

「小僧が二人、下女が一人、これはお早ほうしゅうものといつて、房州者でございます」

「商売の方は？」

「大した繁昌でございます」

「それにしちや人数が少ないようだが」

「番頭さんの外に、若旦那の金三郎さんと、甥おいの久太郎さんが店をやり、御出入りの大名旗本方へも参ります」

名代の握り屋だけに、人の数までも最少限度に切詰めているの
でしょう。

「その久太郎というのは？」

「お紋さんと従いとこ兄妹同士で、三十そこそここでございます、肌合はだあいの
面白い方で」

「そんな事でよかろう、行って見るとしようか」

「私がここへ来たことは、どうぞ内証ないしよにして置いて下さい」

「それは心得こころえているよ」

銭形平次は斯こうして、この厄介な事件に乗出しました。

平次が中橋なかばしの鳴子屋へ行つた時、仕度までした葬とむらいが、門口で

ガラツ八に止められて、大揉おおもめの真まつ最中でした。

「親分、これはどうしたことでございます」

青くなつて顫ふるえ上つている家族や奉公人の中から、平次の顔を見ると、いきなり飛出して来たのは三十前後の恰幅ひげの立派な男あと。髯ひげの跡も青々とした、ただの呉服屋の番頭ふさわというよりは、町奴まちやつこ、浪人者といつた方が相応ふさわしい男振りです。

「お前さんは？」

「亡なくなつた主人の甥おいの久太郎でございます」

「それなら話はよく解るだろう。検屍が済まないうちは、その葬いは出しぢやならねえ」

「どう言うわけで、親分」

「ともかく、もういちど奥へ引込めて貰おうか」

「――」

門口へ出た葬とむりいを、もういちど奥へ引返させるのは、あまり縁

起の良いことではありませんが、久太郎もその上争う氣力がなかつたものか、素直に元の部屋に引返して、次の指図を待ちました。

それから半刻、はんとぎ 気まずい時が遅々として過ぎて行きます。平次が下っ引を走らせて呼んだ係り同心が二三人の手先と駆け付けたのは申刻少し過ぎ。ななつ

棺を開いて死骸に何の異状もなければ、女世帯の町人とは言つても、幾つかの大名屋敷の御用まで勤めた鳴子屋の暖簾のれんに傷をつけて、銭形平次は引込みが付かなくなります。

息を呑んだ家族奉公人の顔を一とわたり眺めて、平次も何やら自信のグラ付くのを感じないわけには行きません。馴れた平次の眼に映ったところでは、この中に主人を手を掛けるような、大それた悪人が一人も交って居そうには見えなかったのです。

棺かんの蓋ふたは開かれました。中は型の如く経帷子きようかたびらに、薄化粧をさせた女主人お釜おんなあるじの死骸。

「おッ」

平次も係り同心も驚きました。襟のあたりは巧たくみに茶袋で隠してありますが、それを取除くと、たった一と眼で判る紐ひもの跡が、凄まじい黒血を滲にじませて顎の下へ大きな溝みぞになっっているではありませんか。

「これでも検屍を願ったのが不服だというのか」

平次もさすがに、久太郎を顧かえりみて声を励ましました。

「へエ——」

「変死人を隠して葬式を出して済むと思うか、——誰がいつたいこの始末を隠すことを考えたんだ」

「私でございます、親分さん」

言下に番頭の用助が応えました。こた月代の光沢のよくなつた、少し鈍重らしい五十男です。

「いえ、世間様を騒がせたくないと思つて、皆んなで相談してやったことでございます。番頭のせいじゃありません」

若い養子の金三郎は、たまり兼ねた様子で遮りました。

念のため間取りを見ると、主人お釜あるじの部屋は一番奥の六畳で、

雨戸を開けて庭へ出ない限り、通路はたった一つ、襖を開けて掛

暖簾のれんをくぐって、廊下を店口へ出る外ほかはありません。

廊下の左右には、薄暗い部屋が二つ三つ、其処めいに姪のお紋と番頭の用助とが寝やすみ、お勝手の傍の二畳には下女のお早と下男の七平、養子の金三郎と甥の久太郎は、二人の小僧と一緒に、二階の三間に分れて寝やすんでいるのです。

平次は自分で二階へ登って見ましたが、普請ふしんが古いので、段々がきしんで変な音を出します。昼ではあまり気が付きませんが、夜分目ざとい人なら、気が付かずには済まないでしょう。

「よく鳴る階子はしごですね、親分」

八五郎は下から声をかけました。

死相の女



©2017 萩 柚月

「手洗ちようずに起きたと思うだろうよ」

「なるほどね」

平次の言葉の含蓄がんちくを味わうようにガラツ八は首を傾かしげました。

「主人を怨んでいる者は？」

平次は番頭の用助じようせきどおに定石じようせき通りのことを訊きました。

「へエ——」

用助は淋しい苦笑いを浮べて、久太郎かえりを顧みます。

「私の叔母ですが、敵の多い人でございましたよ」

久太郎は引取って答えました。

「家の者の中では？」

と平次。

「まさか殺すほどの悪人も居りません」

「すると、怨んでいる者はあつたわけだね」

「――」

久太郎もさすがに口をつぐみました。併しかしこれは久太郎の口を開かせる迄ありません。小僧や下女や、近所の衆や親類の者の口裏から、平次と八五郎は、やがて重大なことを聞込んでしまったのです。一と口に言えば、鳴子屋の家の者で、主人のお釜を怨うらんでいない者は、たった一人もいなかったということでした。

死相の女

奉公人たちは、選よりに選つて親許や家のない者ばかりで、その

上給料を一年も二年も溜められ、それを棒に振る決心でなければ、
鳴子屋から出るわけに行かず、番頭なるこやの用助などは年に五両の給料
を、五年越溜められた上、白雲頭しらくもあたまから奉公して、百両に纏めた金
を先代に預けたまま、今以って返して貰えないという、ひどい目
に逢っているのです。

養子の金三郎とお紋は、三年も前から一緒にして貰う約束でし
たが、今年はお紋まえやくの前厄だから、今年はお本厄のびのびだからと延々となつ
ております。いよいよ来年こそはといつて居ても、その時になる
とまた、今年の後厄だから——と、際限もなく祝言を延ばされる
ことでしよう。

そして金三郎は給金のない番頭として、お紋は髪錢湯錢もままにならない下女として、これから先幾年働かなければならなかつたでしょう。

「七平は？」

平次は念のために訊いて見ました。そんな空気の中から、主人の変死を密告した、七平の気持が知りたかつたのです。

「あれは別ですよ、おんみつ叔母の隠密だから」

久太郎は嘔んで吐き出すように言い切ります。

四

検屍けんしの役人が帰った後、平次と八五郎は、根気よく調べ上げました。

「お勝手の戸締りは、朝誰が開けることになって居るんだ」

「七平どんか私ですよ」

下女のお早が、嫁ゆめき遅おくれらしい顔を出しました。

「昨日の朝お勝手が開いていたそうじゃないか」

少し遠くの方に、素知らぬ顔をしている七平を意識しながら、

平次は訊たずねました。

「そんな事はありません、私が開けたんですから」

お早は事もなげです。

「そいつは話が違って来るようだな」

「お早どん、お前が開けたのは、何時だい」

七平も少し面喰めんくらいました。

「卯刻むつ少し前ですよ」

「それから何うした？」

と平次。

「少し早いから、もういちど自分の部屋に帰って着換きがえやなんか
しました」

多分、もういちど床の中へもぐり込んだのでしよう。

「七平がお勝手の開いてるのを見たのは？」

「ちょうど卯刻むつでした」

「そのあいだ誰もお勝手を通りはしまいな」

「通ったものがあれば、私かお早どんかが気が付く筈です」

下男部屋と女中部屋が、奥からお勝手への通路を挟はさんで関所になつていたのです。

「親分、ちよいとお顔を」

「何だい、八」

ガラツ八が招まねき猫のような手付をして居るのを見ると、平次はお勝手から水駄みづだを突っかけて、裏口の方へ出ました。

「この潜戸くぐりも開いちゃいなかったそうですよ、親分」

八五郎は嚴重な締りをした潜戸を指しました。

「多分そんなことだろう」

「あつしには見当が付かなくなりましたよ、少し筋道だけでも立
てて下さい」

「どんな筋道だい」

「七平が言うとおり、お勝手が開いていれば、下手人げしゅにんは外から

入って、外へ逃げた筈じゃありませんか、ところが下女は自分で
開けたというし、この通り、お勝手から外の往来へ出る裏口も、
きのうの朝は開いていなかった——小僧二人の口が合うところ

を見ると、これも満更嘘うそじゃないでしょう」

「で？」

「下手人はやはり家の中の者でしょうね、親分」

「それがまるつきり解らないよ」

「へエ——」

銭形平次に解らない事が、子分の八五郎に解る道理はありませ
ん。

「俺はお前と違ったことを考えていたんだ、——下手人が家の者
なら、疑うたがいを外へ持つて行くように、何処か一カ所は開けて置く
に違いない——とな。だから、お勝手が開いていたと聞いた時は、

てつきり家の者の仕業だと思つた」

「なアーる」

ガラツ八、正に一言もありません。

「ところが、お勝手を開けたのが下女だというから、話が違つて来る。その上裏の潜戸迄閉つていちゃ念入りだ、——くせもの曲者家にあり——と書いて置くようなものだ、どうも外の者らしい匂いがする」

「へエ——」

「もう少し念入りに見よう」

平次はもう一度家の中に取り返しました。きのうの朝家中の

雨戸を開けた者を調べて見ると、店から居間の雨戸を開けたのは小僧の一人で、これは何の仔細しさいもなかったと言います。

奥を開けたのは、女主人おんなあるじの死んでいるのを見付けた姪めいのお紋。

「そう言えば、雨戸に心張がありませんでした」

「雨戸に締しまりがなかったのかい」

「いえ、叔母は用心深い人で、雨戸は二重に締めるんです。棧さんを卸おろして、その上心張棒をして」

「その心張はなかったのか」

「棧さんだけおりて、心張は戸袋の隅に立ててありました」

こう言うお紋は、決して美しくはありますが、愛嬌のある、

健康そうな娘でした。

「その晩に限って忘れたんじゃあるまいな」

「そんな筈はございません。この七日の間は、まるで気違いのように戸締りばかり気にして居たんですもの」

「七日の間——そいつは、どんな事なんだ」

「——」

お紋は言つてはならぬ事を言ったように、黙りこくつてしまいました。

「言つてくれ、そいつはわけがありそうじゃないか。叔母さんが、何を怖こわがつていたんだ、——誰が叔母さんを脅おどかしていたんだ」

「――」

「お前が言わなきやア、他から聞く手もある。が、叔母の敵を討つのは、差向きお前だ。こいつは、隠して置いちや済むまいぜ」

「申します、親分さん」

お紋は思い切った顔を挙げました。見てくれはそんなによくありませんが、こう話していて、いろいろ感情の動きを見ると、この娘には、言うに言われぬ素直なよさがあります。

「それはいい心掛だ、――叔母さんが何を怖がっていたんだ」

「げんげんさい玄々齋の言った事だそうです」

「玄々齋が何を言ったんだ？」

両国の人相見が、いよいよ此処に登場したのです。

「七日経たないうちに、死ぬ——と言ったんだそうです」

「叔母さんがかい」

「え、——叔母は玄々斎の言うことなら、どんな事でも本当にしました。それから外へ——と足も出ず、戸締りを一々自分で見廻って、本当に息を殺して奥の部屋に居たんです」

「それは何時いつのことだ」

「死んだのは、ちょうど言われてから七日目の晩に当ります」

「皆んなそれを知っているのか」

「私と金三郎さんと、久太郎さんと、番頭さんが知っているだけ」

です。久太郎さんは大層心配して、死ぬと決った命も、慈悲善根じひを施ほどこして助たかった例ためしがあるから、といろいろすすめたようですが」

「叔母さんは慈悲善根を施ほこす気がなかったと言うのだらう」

「――」

お紋の話で、事件に新しい段階が現たれました。これを辿たどって行いったら、何処どこまで行くことでしょう。

「親分、変なことになったね」

横合からガラツ八が首を出しました。

「八、家中の出口を捜たしてくれ」

「へエ——？」

「入ったところは要らない、出口だけ捜すんだ。天窗、縁の下、掃除口、引窓、そんなところだ」

「入口は出口じゃありませんか、親分。人間が出られるところなら、入られる筈で」

「理窟を言うな、——外からは入られなくたって、内からなら出られる場所があるだろう。捜して見な」

「へエ——」

八五郎は飛んで行きました。

五

「親分、そんな出口はありませんよ」

ガラツ八はぼんやり帰って来ました。

「そんな筈はないが——」

「天窓も掃除口も、人間が潜くぐれないほど小さいし、お勝手の引窓

は恐ろしく高くて、梯子はしごでもなきや潜くぐって出られませんかよ。それ

に、きのうの朝見た時は、窓を締めたまひもま紐こうじんぼしらが荒神柱ひもに結んで

あったそうですよ」

「フーム」

「曲者は家の者でないとすると、何処から入ったんでしよう、親分」

「宵から入っていたのさ、——どこかに隠れていて、夜中に主人を殺し、暁方前に脱出したのだよ」

「家の者とぐる、ぐるになっていて、曲者の出た跡を、そつと締めたんじゃありませんか」

「それも考えられないことはないが、そんな事までして、家の者に疑いをかけるのは、危ないことじゃないか。外から曲者が入ったのなら、手引があつたにしても、此処から逃げましたと開けて置くのが本当だ」

「じゃ、下手人はやはりこの家の者でしょう」

「いや、違う、——これを見るがいい」

平次はガラッ八といっしょに庭に降りました。先刻見た裏口とは反対の方、奥の主人の部屋の前の板塀いたべいの上に、忍返ししのびがえが少し損じて、古釘に新しい中きれが少し引っかかって居たのです。

「これは？ 親分」

「曲者の残して行った手形だよ。花色はないろ木綿もめんの裏地だ、——が一度

も雨に当たっていないところを見ると、一昨夜おとといの曲者がここから逃

げたものと決めてよかろう、——どうして家を脱出ぬけだしたか、それ

が解りさえすれば」

平次は腕を組みます。

「親分、両国へ行つて見ましようか」

「ウム、玄々斎を当つて見よう。死相を占ううらなのは法度はつとだ、構わな

いからうんと脅おどかして見るがいい」

「親分は？」

「俺は一と足後から行く」

「それじゃ」

ガラツ八は残る陽足ひあしを惜しむように両国へ飛びます。

その後で平次は、金三郎と久太郎と用助と、一人一人に逢つて見ました。

「この店の後はお前が取るんだね」

「へエ——」

気の弱そうな金三郎は、たったこれだけの問いにもう真青になります。万両分限ぶげんの鳴子屋の身代のためには、虐げしいた尽されている養子の金三郎は何をするかも解らないと思われるかも知れないのです。

「番頭はどうなるんだ」

「そのまま店にいて、支配をして貰います」

「大分金だいぶや給料を預かってあるということだが」

「今朝みんな返してしまいました」

「大層気の早いことだな、番頭の方から欲しいとでも言ったのか」

「いえ、久太郎さんの指図で」

此処にもまた久太郎が意志を働かせて居ります。

「いくら返したんだ」

「預かったのが百両、給料は二十両、それに利息りそくを入れて、百三十両。私から心持だけの手当二十両を加えて、百五十両にしてやりました」

「久太郎は？」

「まだ何にも話をしませんが、いずれ暖簾のれんでも分けることになりましょう」

「金があるのか」

「五百や三百は、私が出します」

金三郎の答えには何のこだわりもありません。

それから、用助ようすけと久太郎に逢いましたが、一々金三郎の言う通りで、何の変ったところもありません。この家中の者は、主人のお釜が死んだためにいくらかずつ得をしていることだけは確かたしです。

平次はあきらめて両国へ、八五郎の後を追いました。広小路の

葭簾小屋よしずを覗くと、中は空からっぽ、薄暗くなると引揚げて、浜町の

家へ帰ることを確かたしめて、玄々齋の隠れ家へ辿たどり着いたのは、も

うすっかり暮れてからでした。

「何だと、死相があるから死ぬと言った？——それじゃ、七日と日を限ったのはどう言うわけだ。その七日目にお釜は死んだんだぞ。手を下さなくたって手前は下手人見たいなものだ」

ガラツ八の声です。

「それはこの玄々斎の観相がよく当るからだ、何の不思議もない」
八五郎の噛み付くような声に応じて、落着き払った玄々斎の声。
少し高慢な、そのくせ媚びるような調子で聞えます。

「死相を観るのは御法度だぞ、野郎」

「そう言っても、ありありと現れたものは、教えてやるのが親切

だ、——慈悲善根を施せば、死相は自然に消えてなくなるとも
言つて上げたが——」

玄々斎はますます落着き払います。

「八、そいつを縛つてしまえッ」

平次はいきなりガラツと格子を開けました。

「御用だぞッ」

八五郎は親分の顔を見るとすっかり威勢がよくなって、高々と
銀磨ぎんみがきの十手を振り上げます。

「あれえ」

悲鳴をあげたのは、白粉おしろいの濃こい大年増。これは後で、玄々斎の

女房のお弁べんと知れましたが、三十五六の小皺こじわを、厚化粧で塗りつぶし、真っ赤に口紅を塗った——その当時にしては物凄い女です。後ろに眼ばかり光らせて、ガタガタ顫えているのは、弟子の滝たき松まつ、二十七八の小柄な男で、往来で呼込みをやるのが稼業ですから、恐ろしく陽ひに焦けて居りますが、気の弱そうなところがあります。

「八、構わないから引ひつ括くって番所へしよつ引いて来い。お係りに願って、夜っぴて叩いて見る」

平次にしては、何という荒っぼい言い草でしょう。

「合点」

八五郎は平次の眼の色を読むと、総髪そうはつの玄々斎を膝の下に敷いて、キリキリと縛り上げました。容赦なさけも情もない、深刻な深縄ふかなわです。

「ああ痛ッ」

「騒ぐな野郎、人間一人絞め殺したんだ。手の一本や二本折れたって、何だ」

「と、飛んでもない、親分さん方。鳴子屋の女主人おんなあるじが、七日のうち死ぬと言ったのはこの玄々斎ですが、手にかけて覚えなどはありません」

「黙れッ」

「いえ、黙つちや居られません、人殺しの下手人にされちや叶かなわない」

「それじゃ本当の事を言うか」

と平次。

「本当にも嘘にも、死相のあるのを言ってあげたまでの事で」

「野郎、まだ馬鹿にする気か、死相なんて大出鱈目おおでたらめだ。万々一死

相が本当にしても人間の面が曆こよみじゃねえ、七日と日を限きって、そ

んな大胆なことが言えるものか。当らなかつたら手前てまえどうするつ

もりだ」

「それが、その慈悲善根ほどを施ほどこせば——」

「馬鹿ッ、この野郎容易のことじゃ本当の事は言うまい。死相をうらな占つただけでも、遠島か追放は免れまぬがつこはねえ。番所へつれて行って、存分に引ばたつ叩け」

「あッ、御勘弁、お許し下さい。申します、皆んな申上げます」
玄々斎は畳に額をすり付けました。四十前後の、顔も恰幅も立派な男ですが、亡者もうしやには睨みがきいても、銭形の平次を誤魔化ごまかしようはなかつたのです。

「よし、正直に言うなら、縄だけは勘弁してやる。次第もくろみによつては、御慈悲を願つてやらないものでもない。どんな目論見があつてそんな大それたことを言つたんだ」

「済みません。実は、鳴子屋の久太郎さんに頼まれました」

「何？」

あまりの予想外な言葉に、平次もガラッ八も驚きました。

「久太郎さんがやって来て、——奉公人の給料を払わないばかりでなく、養子と姪めいの祝言の入費さえ出し渋る叔母に、何とか目を覚さまさしてやりたい、頼むから慈悲善根ほどこいを施さなければ、七日経たないうちに死ぬと言ってくれ、叔母はこの世の中で、お前の言う事だけを本当にするから——とたつてのお頼みでした」

「それを引受けたのか」

「へエ——、人助けの為と思ひまして」

「――」

人助けのために、何かするような人間ではありませんが、平次はともかくも、その言葉に堪能したものらしく、ガラツ八を促うながして、宵の街を中橋まで引返しました。

「親分、あっしっには薩張さっぱり解らねえ」

「だんだん解って来るじゃないか、あの部屋から、下手人がどうして出たかさえ解れば」

六

中橋の鳴子屋に引返した二人、久太郎を物蔭に呼んで、

「叔母に死相があると、玄々斎に言わせたのは、お前だったそうじゃないか、何だつてそんな馬鹿な細工さいくをしたんだ」

平次は高飛車に出ました。

「恐れ入りました。玄々斎に頼んで、叔母を脅おどかしたのは、この私に相違ちがございません。そうでもしなければ、叔母は無慈悲非道が募つつて、生きながら地獄に墮おち兼ねなかつたのでございます」

「少し薬が効きき過ぎたな」

「へエ——、今では後悔して居ります。が、玄々斎が、弟子を使つて、妙な細工をしていることを聞くと、一寸ちよつとそんな事をやって見

る気になりました」

「妙な細工とは何だ、——そんな無理な頼みを、玄々斎が聴容れるのが不思議だと思つたが」

「こんなわけでございます。親分さん、あの玄々斎という奴は悪

い人間で、きんちやくきり巾着切上がりの弟子の滝松というのを使つて、近所で

かつ払い、こそ泥、かどわかし誘拐を働かせ、その盗つた物やさらつた子供

を隠しておいて、人相や占いうらなの客が来ると、その場所を言い当て

てやるのだそうでございます。私はこのからくりを滝松の友達か

ら聞きました。あんまりな悪戯わるさだから、お上へ申上げようと思ひ

ましたが、フト気が變つて、それを種に玄々斎をうんと言わせ、

少しでも叔母の心を柔やわらげようと思ったのでございます。出鱈目な人相観が当って、叔母が七日目に殺されたのは、どうした廻り合せでしよう。こうなると、死んだ叔母に申訳がなくて、じつとして居られないような心持になります」

久太郎はすっかり打ちひしがれて、何も彼かも白状してしまいました。

「ところで、その細工を知っているのは、誰と誰だい」

「私と玄々斎だけです。尤もつとも、玄々斎のところでおおど脅かされて来た

晩、叔母は番頭と金三郎とお紋には話したようですが」

「玄々斎の家で誰か聞いてはいなかったか」

「誰もいなかた筈ですが、私が帰つてから女房や弟子に話したかも知れません」

「玄々齋の女房は恐ろしく若作りだが、あれはどんな女だい」

「玄々齋と叔母が懇意にしているのが気に入らなかつた様子です。叔母は四十を越していましたが、あの通り元気もので、それに万両分限の女主人おんなあるじですから——」

平次も次第に事件の輪郭りんかくが解つて来るような心持がします。が、相変らず、下手人がここから脱出ぬけだした秘密だけは解りません。

「もういちどあの部屋を見せて貰いたいが」

「へエ——、どうぞ」

久太郎に案内させて、平次と八五郎はお釜の殺された部屋に入って見ました。

その時はもう雨戸も締め、さん棧も心張もおろしておりましたが、平次は心張を外させ、棧をあげて雨戸をあけました。

「八、ちよつと気が付いたことがある。よく見ていてくれ」
そう言いながら、庭下駄を突っかけて外に出た平次。半開きの雨戸に手をかけて、外からそつと閉めました。

「あッ」

ガラッ八が驚いたのも無理はありません。外から雨戸を閉め切ると、さん重い棧は生き物のように動いて、独りでにそろりと穴の中

へ落込み、雨戸は内から閉めたと同様に、げんじゆう 嚴重しまに閉つたのでした。

心張無しで、棧だけおりて居たわけはこれで判りました。

「八、忍び返しあわせの釘で、裏を破つた袷あわせを捜し出せばいい、行こう」

平次とガラツ八は、夜の更くるも厭わず、もういちど浜町の玄々齋の家へ引返したことは言うまでもありません。

七

それは併しかし大変な見当違いでした。

一昨夜は玄々齋の女房べんお弁の里から、妹たちが二人まで来て話

し込み、狭い家へ泊り込んで、お弁も玄々齋も一步も外へ出な
かったことは、はつきり判ってしまったのです。

「滝松は」

「町内の人達と、三日前から江の島へ参りました。帰ったのは昨
日の昼過ぎで——」

滝松——きんちやくきりあが巾着切上りという、あまり善人らしくはない男ですが、

人などは殺せそうもない小さい男が、頭をポリポリと掻きます。

江の島へ行ったのは十七人、滝松もその一人で、鳴子屋の女主
人の殺された晩は、若い者の発議で品川に泊り、その晩半分ほど
は土地で遊んだことまで、あり余るほど証人があります。

一行十七人、悠々閑々ゆうゆうかんかんと歩いて江戸に入つて、浜町へ辿り着いたのはその翌る日の昼過ぎ。

念のために、玄々斎の着物、滝松の着物を一枚一枚調べましたが、花色木綿はないろもめんの裏の捲むしられた袷などは一枚も見当りません。

その間に、平次の発見したのは、玄々斎の女房のお弁が、すっかり厚化粧を洗い落して、急に五つ六つ老けていたことだけでした。

「親分おどろいたね」

「フーム」

銭形平次も旗を巻いて引揚げるだけです。

それから三日。

「親分、なかぼし中橋の庄太親分が、金三郎とお紋を縛ったそうですよ」
ガラツ八が新しい情報を持って来ました。

「そんな馬鹿なことがあるものか、あの二人はこの上もない善人だ。久太郎を縛るならまだ話の筋は通るが——」

「久太郎が下手人で？」

「いや、久太郎じゃない、——俺はつまらない事に気が付かずにいたんだ。今日は一つ品川まで行って見よう」

「へエ——」

平次は急に仕度をする、ガラツ八をつれて品川まで歩きました

た。日本橋から二里、平次と八五郎の達者な足で飛ぶと、たった一刻ときで着いてしまいます。

宿外れの鶴屋という旅籠屋はたごの暖簾のれんをくぐると、平次はいきなり

番頭を呼出して、五日前の晩の、浜町の江の島詣りの連中のことを訊たずねました。

「大層なお元気でございました。このまま江戸へ入っちゃつまらないからと、若い方々が無理にお泊りになったようで、へエ、お人数は十七人で」

「みんな此処へ寝たわけじゃあるまい」
と平次。

「それはもう、若い方でございます。一度はみんな土蔵相模へお出でになりました、そのうちでもお年を召した方が、大引け過ぎに半分ほど手前どもへお帰りになりました」

「誰と誰が土蔵相模へ泊ったか解るまいな」

「さア、それは、十人ほどもお泊りでしたから、ちよつと解り兼ねますが——」

それ以上は番頭にも解りません。

「気の毒だが、その晩出した貸し襦袢どてらを見せてくれないか、——

どうせ旅装束たびしやうぞくで土蔵相模へ行ったわけじゃあるまい」

「へエ、お安い御用で」

番頭は平次を案内して納戸につれ込むと、女中の手をかりて十七八枚の丹前を出しました。

「これでございます、親分さん」

「どれどれ」

八五郎の手をかりて、二人でその十七八枚の襦袢どてらの裏——花色木綿を調べて行くと、

「あつた、親分」

とうとうガラツ八が発見しました。一枚の襦袢の裏が釘ひきさに引裂かれて、一寸五分ほど、捲むしり取られたまま白い綿を見せて居るではありませんか。

鳴子屋の塀の釘に残った巾きれを平次は懐から出しました。当てて見ると、大きさも、色合も、寸分の隙もなくピッタリと合います。

「親分」

「あの野郎だ」

二人は番頭に礼を言つて、一気に浜町まで飛びました。玄々齋の家を覗くと空からつぽ。

「両国だ」

「それッ」

真つ直ぐに両国へ——。

「御用ッ」

「滝松、神妙にせい」

よしず 葭簾の前後から飛込んだ平次とガラッ八。

「何をッ」

滝松は隠し持ったあいくちヒ首を抜いて、猛烈に抵抗ていこうしましたが、それも平次に叩き落されて、ガラッ八の手でキリキリと縛り上げられたのです。

盛り場の人垣の中、それを引いて行くガラッ八の得意そうな顔と別れて、平次は自分の家へ久し振りで晴々した心持で帰りました。

「何だつて滝松が、あのお釜かまを殺す気になつたんでしよう」

その晩、ガラツ八は平次に絵解きをせがみます。

「いずれお白洲しらすでわかる事だろうが、あれをやらないと滝松の心持がすまなかつたのさ」

「へエ——」

「今までも、盗んだり誘拐かどわかしたりして、玄々齋に言い当てさせている滝松だ。あの死相だけ一つ外れちゃ、自分のせいのような気がするんだろう。悪人には妙にそういった片意地なところがあるものだ。それからもう一つ、あの師匠の女房のお弁べんという女に頼まれたんだろう」

「へエ——」

「玄々齋がすっかりお釜に取入って、お釜が来たり玄々齋が行つたりするのが心配だったのさ。お弁は亭主のにんそうみ人相観の信用を落さないようにしてくれとか何とか持ちかけて、始終しじゅう鳴子屋へ使いに行って奥へ自由に出入りの出来る滝松にあんな大それた事を頼んだんだろう。お弁の厚化粧が急に素顔になったのはただ事じゃないよ」

「悪い女だね」

「いずれお白洲へ呼出されて、何とかおしおき処刑になるだろう。しかし、旅籠屋のどてら襦袢を着たまま二里の道の中橋まで来て、夜明け前

に品川へ引返した滝松は恐ろしい人間だよ」

「久太郎は？ 親分」

「叔母をからかったのは少しやり過ぎだが、あの男に悪気わるげはない、
——番頭や金三郎お紋のことまで考えてやったことだから、軽い
おとがめで済むだろうよ」

「へエ——」

「鳴子屋には一人も悪人がいなかったのさ。金三郎も良い男だし、
お紋も良い娘だ。番頭の用助も結構過ぎる人間さ。悪いのはあの
玄々斎のペテン野郎だ、でたらめ出鱈目な人相見の癖くせにサクラなんか使っ
て、どれだけ諸人が迷惑したことか——」

平次はそう考えていたのです。

銭形平次の家には、元の平和が戻りました。

煙草の烟けむりと、植木の手入れと、お静の料理と、そして八五郎

の頓狂な話と——。長閑のどかな初夏の風物です。

(編注)

作品中には、身体障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

死相の女

初出―「錢形平次捕物百話」第七卷 中央公論社 昭和十四年五

月二十五日発行

底本―「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七

月十五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>